

「シリーズ／比較民話」

(四) 踊る骸骨／歌う骨

序

善良な人物が嫉妬心や金銭欲に駆られた仲間（兄弟）に殺されるが、年月が経過し、最後に彼の骨が犯罪を暴く昔話「歌う骨」⁽¹⁾は、一度聴いたら（読んだら）忘れられない独特な印象深さを持っている。国際基準であるアールネ／トンブソンの『昔話のタイプ』Arne/Thompson: The Types of the Folktale⁽²⁾（以下、ATとも略記）はこの「歌う骨」The Singing Boneを「本格昔話」B「宗教的物語」七八〇番に分類し、その伝承地域として、フィンランド、エストニア、リトアニア、デンマーク等のバルト海沿岸

高木昌史

（北欧）、スコットランド、アイルランド、イギリス等の島国、また西欧フランス、ドイツ、オランダ、南欧イタリア、スペインそして東欧ルーマニア、ハンガリー、チェコ、ポーランド、ロシア等、要するにヨーロッパ全域の他、東洋ではトルコ、インド、日本等、また北米と中南米、さらにアフリカを挙げている。⁽³⁾

まさしく全世界的な分布を示す昔話「歌う骨」の魅力は、恐らく、死後もなお人間のかたちを久しく留める骨の持久力および一種謎めいたその特性と密接に関連しているように思われる。実際、骨は物語の中で、生（この世）と死（あの世）を連絡する重要な役割を演じ、聴き手（読者）は、骨に導かれて、不可思議な世界へ誘い込まれてゆ

く。

本稿では、「歌う骨」タイプの類話を幾つか読みながら、骨の神秘について考えてみたい。テキストとして、グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen (以下、KHMとも略記) 二八番「歌う骨」⁽⁴⁾と日本昔話「踊る骸骨」⁽⁵⁾を東西の両極に据え、地理的な中間地点であるインドとイタリア・シチリア島の民話を取り上げる。続いて、骨に関する神話・伝承を数篇覗いたあと、ふたたびKHMの四七番「ねずの木の話」を読みながら、骨の民間信仰、とりわけ、骨と輪廻転生の思想との関わりを探ってみることにしたい。

第一章 「歌う骨」(ドイツ/日本)

初めに、西欧ドイツと日本の「歌う骨」類話を幾つか紹介する。前述グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』KHM 二八番「歌う骨」Der singende Knochen は次のような内容である(要約)。

— A 「歌う骨」(ドイツ)

昔々、ある国で猪が暴れ困っていた。畑を荒らし、家畜を殺し、牙で人間を襲った。

王様は大きな褒美を約束したが、猪は大きく強く、誰も森に近づけなかった。王様は遂に猪を退治した者に一人娘を妻にやると布告した。

この国に二人の兄弟が住んでいた。貧しい男の息子たちで、猪退治を引き受けると申し出た。兄は狡猾で高慢心から、弟は無邪気で善良な気持からそれを申し出た。獣を見つめるには各自反対側から森に入るがよい、と王様が言い、兄は日の沈む方角、弟は日の出る方角から出発した。弟がしばらく行くと、小人が出て来て、お前の心は邪気がなく善良だからと言って黒い槍をくれた。弟は小人に礼を言い、槍を担いで行くと、猪が突進して来た。彼は槍で怪物を退治し、それを肩に担いで家路に就いた。

森の反対側に出ると、一軒の家があり、人々が踊ったりワインを飲んだりしていた。そこで景気づけに一杯飲んでいた兄は、弟が獲物を担いで森から出て来たのを見て、嫉妬心と悪心が湧き、弟に一杯やって休むように言った。兄

は夜まで弟を引き留め、一緒に出掛けた。暗闇の中、小川の橋を渡る時、兄は弟を先に行かせ、背後から突き落とすて殺した。弟を橋の下に埋め、兄は猪を王様のところへ担いで行き、自分が仕留めたと申し出て王女を妻にし、弟は猪に引き裂かれたにちがいないと語った。

神の前では何事も隠し通すことは出来ず、犯行は明るみになることになる。年月が経過し、一人の羊飼いが群れを追って橋を渡ったとき、下の砂の中に白い骨を発見した。それで角笛の歌口を作って吹くと、骨が独りで歌い出した。「ああ、羊を飼うお方、／あなたは私の骨を吹く、／私の兄は私を殺し、／橋の下に埋めました、／……」

羊飼いが不思議な角笛だと思い、王様のところへそれを持って行くと、角笛は同じ歌を歌った。王様は事の成り行きを察知し、橋の下の地面を掘らせた。すると骸骨が出た。悪い兄は袋に縫い込まれ、生きながら水に沈められた。殺害された弟の遺骨は教会墓地に安置された。⁶⁾

一八二二年の初版以来、KHM二八番に収録されている「歌う骨」は、カッセル（ニーダーヘッセン）出身のドルトヒエン・ヴィルトトから、同年一月、ヴィルヘルム・グリ

ムが聞き書きしたもので、初版の三人兄弟は、第二版（一八一九年）以降、二人兄弟に書き改められた（H・レレケ注⁷⁾）。

第三版第三巻のグリムの「原註」Originalanmerkungen（一八五六年）には、本話以外に五篇の類話と古いスコットランド歌謡が紹介されている。⁸⁾ 後者では、「潮死させられた妹の胸骨から豎琴弾きが豎琴を作る。すると、それが独りで演奏を始め、罪を犯した（殺した）姉に禍あれと叫ぶ」（スコット『吟遊詩人の歌』⁹⁾）。「原註」は他に、フェロー諸島（アイスランドとイギリスの中間に位置）の歌謡——ここでは豎琴の弦が殺害された女性の毛髪から作られる——、エストニアの民謡、そしてセルビアの昔話——ニワトコから作られたフルートが秘密を告げる——、最後に、南アフリカ・ボツワナの昔話を類話として挙げている。¹⁰⁾

ドイツを含むヨーロッパ諸地域の「歌う骨」ばかりではなく、南アフリカにまでグリム兄弟の視界が及んでいることにあらためて驚かされるが、注目されるのは、犯罪（殺人）を暴くのが、人間の身体の一部（骨／毛髪）から作られた楽器（角笛／豎琴／フルート）であることだ。身体と楽器の内密な関係が、真実を暴露する契機となっているの

である。

ところで、「歌う骨」はわが国にも伝承されている。いわゆる「歌い骸骨」タイプ(1)がそれであるが、本稿では先ず、稲田浩二編『日本の昔話』(上)から有名な「踊る骸骨」を紹介したい(要約)。

一 B・1 「踊る骸骨」(日本／新潟県長岡市)

昔、山方「やまがた」の村に六べえと七べえの仲良しがいた。二人は仕事を求めて里方へ旅稼ぎに出掛けた。三年間働き、真面目な六べえは金を貯め、怠けた七べえは土産も買えなかった。六べえがその分まで買って山の村へ帰る途中、谷に架かる一本橋に来た。六べえが七べえに先に渡るように言うと、後者は、金も荷物も持ってやるからお前が先に渡れと言った。素直な六べえが金と荷物を七べえに預け、橋の中ほどに行くと、七べえは六べえを橋から突き落とした。六べえは深い谷底に落ち死んだ。七べえは六べえの金と荷物を盗み村へ帰り、六べえは旅の帰りに一本橋から落ちて死んだと語った。こうして一年、村にいた七べえは盗んだ金を使い果たし、ふたたび里へ働きに出た。一本橋に来ると、ガツ

タ、ガツタ、ガツタ、ガツタと音がして、後ろを見ると、真つ白い骸骨が、七べえと呼ぶ。気味が悪く逃げようとする、骸骨は、おらは六べえだ、おれを一緒に連れて行ってくれたら金儲けをさせてやる。骸骨姿で踊るから見世物にして金を取れ、と言う。七べえは喜んで六べえの骨をたたみ風呂敷に包んで稼ぎに出掛けた。踊る骸骨が珍しく、皆は金を出してそれを見た。七べえは、今度は、自分の村で骸骨踊りを見せた。すると骸骨が、おらは七べえに殺された六べえだ、七べえに一本橋で谷底へ突き落され、金も荷物も盗られてしまった、と真実を語った。村の衆は怒って七べえを殺した。いきがボンとさげた。(2)

グリム童話「歌う骨」(KHM二八)のように楽器(角笛)という媒体によってではなく、殺された人物(六べえ)の骸骨が、闇に葬られた犯罪(殺人)を世人に暴露し、犯人(七べえ)は、「歌う骨」の兄同様、処刑される。ここでは、歌に代わって、踊りが復讐の手段となる。そして骨／骸骨自身が真実を明るみにもたらず。

日本版「歌う骨」にはもう一つのタイプとして「継子と笛」がある。西欧版と同様、楽器が介在した話である。

一B・2 「継子と尺八」（佐賀県神埼郡）

昔、竹子と梅子という姉妹がいた。父親は商人で、母親は再婚した継母だった。ある日父親が子供を頼んで、商用で京に出掛けた。姉妹は父親に鏡などお土産を注文した。留守中、母親は二人を苛めた。ある日、竹子に風呂を焚かせ、竹子は破れた箆「ざる」で水を汲まなければならなかった。困った彼女から事情を聞き、托鉢の坊さんが彼の衣の裾を切つて箆にのせてくれた。お陰で風呂に水は溜まったが、母親は風呂を熱湯させ、その中に竹子を押し込んで殺し、裏の竹林に埋めた。妹の梅子は何も知らずにいた。埋めた場所に竹が生えた。

ある日、虚無僧「こむそう」が尺八を吹いて来た。梅子が米をあげると、虚無僧は裏の竹を見て、母親に相談し、竹子の墓から生え出た竹を買った。彼が竹で尺八を作ると、母親は東の方角には吹かないでくれと言った。虚無僧は不審に思つて、敢えて東に向けて尺八を吹いた。すると、商用中の父親の耳に、京の鏡は何になる、

と聞こえた。父親が飛んで帰り、竹子は何処かと訊くと、母親は余所へ行っていると答えたが、最後に白状した。父親は怒つて墓を掘った。はじめに先妻、さらに掘ると、その下に竹子がいて、まだ生きていた⁽¹³⁾（要約）。

継母に殺された竹子の墓（骨）から竹が生え、虚無僧がそれで尺八を作つて吹くと、その音色が異郷の父親のもとに届き、継母の悪事が暴かれる。骨は竹に転生し楽器となつて真実を明るみにもたらしたのだが、殺された竹子は、メルヘン風に、生き返る。「踊る骸骨」では、殺された人物の骨自身が殺人者に復讐するが、右の物語では、犯罪の暴露に楽器（尺八）が介在することによって、全体の印象は憂愁を帯びた西欧のバラード調に近づいている。

話型について

以上、ドイツと日本の「歌う骨」タイプの昔話を見てきたが、ここで一度、「歌う骨」の話型を整理・確認しておきたい。序でも触れたように、アールネ／トンブソンの『昔話のタイプ』（初版／一九二七年、第二版／一九六一年）は、「本格昔話」Ordinary Folk-Tales B 「宗教的物語」

Religious Tales の七八〇番に「歌う骨」The Singing Bone を分類し、その要件として、「兄が弟(妹)を殺し、大地に埋める。羊飼いがその骨から笛を作り、それが秘密を明るみにもたらず」⁽¹⁴⁾を挙げる。KHM 二八番「歌う骨」はまさにこれに合致する。

A T に準拠した池田弘子編『日本民間伝承のタイプとモティーフ索引』A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature by Hiroko IKEDA (F F C 二〇九／一九七一年)は、同じく七八〇番に「歌う骨……歌い骸骨／枯骨報恩／野晒し」The Singing Bone…Urai Gaikotsu; Karehomo Hoon; Nozarashi を分類し、その構成要素として次の四件を掲げる。1 「殺人」Murder、2 「歌う骸骨」The Singing Skull、3 「殺人が暴かれる」Murder Revealed、4 「感謝する死者」The Grateful Dead。⁽¹⁵⁾

池田は A T の要件に、4 として「感謝する死者」を加え、いわゆる「枯骨報恩」を日本に固有の要素としたのである。以上が国際標準である。

一方、わが国では、先ず柳田國男が『日本昔話名集』(初版／昭和二三「一九四八」年)の中で、「歌い骸骨」を「派生昔話」の「因縁話」に、「継子と笛」を「完形昔話」

の「まま子話」に分類した。⁽¹⁶⁾ 続いて関敬吾は『日本昔話大成』(初版／昭和五三「一九七八」年)において、「本格昔話」一〇「継子譚」(二二八)に「唄い骸骨」(「踊る骸骨」を含む)、⁽¹⁷⁾ また同じ「継子譚」(二二七)に「継子と笛」を分類し、「枯骨報恩」は「本格昔話」一二「動物報恩」(二二六)に数え入れている。⁽¹⁸⁾

整理すると、「歌う骨」は、アールネ／トンブソンでは「宗教的物語」、柳田では「因縁話」といった具合に、広義の宗教譚に分類されるが、関は「歌う骨」タイプの物語を「継子譚」と「動物報恩」に分別していることが分かる。ちなみに、池田も、関と同様、「報恩」を日本型七八〇番の基本要素と見做している。

以上、分類法の相違は、ヨーロッパおよび日本の「歌う骨」の源流を探ること、その理由が少し明らかになるように思われるが、その前に、西洋と東洋(極東)の中間に位置するインドと南欧(イタリア)の類話を読んでおくことにしたい。

第二章 「歌う骨」類話（インド／イタリア）

比較考証のために、前章で見たドイツと日本以外の例として、先ず、インドの民話を紹介する（『世界の民話』「パンジャブ」／関楠生訳⁽¹⁹⁾（要約））。

二A 「笛を吹く骨」（インド／パンジャブ地方）

昔むかし、両親に死なれた少年が、叔父の許で羊飼いをしていた。少年は退屈なので小さな笛を作って吹き、上手になった。そのため荒野の獣が集まり耳を傾けた。中に一頭の狼がいた。太った羊に食欲をそそられ、少年にお前を食うか羊を食うか尋ねた。少年が叔父に訊くと、青白い少年と太った羊を見比べて、叔父はお前だと少年に言った。

翌朝、羊飼いの少年が牧場に行くと、狼が来て、少年を食べるか羊を食べるか尋ねた。少年が叔父の答えを言うとうと、狼は少年に同情し、食べたあと何かしてやろうと言った。少年は狼が彼を食べたら、十字路の木に、笛と一緒に、彼の骨を下げてくれと頼んだ。狼は少年を食べ

たあと、約束を果たした。

数日後、盗賊たちがそこを通りかかり、分け前をめぐって争い木の下に座っていると、骨が風に揺れ笛を演奏した。「狼がぼくを食った／叔父さんがぼくを忘れた／さあ、笛を吹き鳴らせ」。骨が一人の盗賊の頭を打つと、盗賊たちは慌てて逃げ出した。

ある日、王様が猟に出掛け、例の木の下を通った。多くの獣が骨の演奏に聞き入っているのを見て喜び、大きな網を張らせ、ライオン、狐、兎等々を捕えて木の下で休んでいると、骨が揺れ笛を演奏した。王様は美しい音色を聴き、従者に誰が演奏しているのか尋ねた。笛吹きは見当たらないと従者が答え、王様は眠りに落ちたが、また笛の音で目覚め、特別な鳥かと思いい木に登って捜した。そして木の枝に下がって揺れる小さな骨を見つけた。王様は笛吹きの名人（骨）に呼びかけ、娘たちのためにお前が欲しいと言とうと、骨は自由の身でいたいと答えて、一番高い枝に飛び移った。王様は言った、獲物を持って帰ろう、色褪せた骨は何の価値もない、と。以後、骨は二度と姿を見せなかった。ただ時々、十字路を通る人の耳に例の笛の音が聞こえた。⁽²⁰⁾

本話が採集されたパンジャブ (Pandschab) 「独」／Punjab [英]) は、ヒンズー語で「五つの河の地方」の意で、インド西北部からパキスタン北東部にかけて広がるインドス河上流の肥沃な農耕地帯である。古代インドス文明(紀元前三〇〇〇年頃)の発祥地として知られる当地方は、同一四〇〇年頃から移住した初期のアリア人の故郷であり、インド＝ヨーロッパ語族の源流でもある⁽²¹⁾。「笛を吹く骨」はこの地方の民話である。

孤児となり叔父に育てられた少年は、自分で作った笛を吹きながら羊飼いの仕事をしていたが、狼に食われて骨となり、木の枝に下がって笛を吹く。少年の境遇を訴えるその歌は、KHM四七番の「ねずの木の話」を想わせるが(後述)、何とも言えない哀愁を帯びている。羊よりは少年を狼に供与する叔父の冷酷さ、少年の遺言を叶えてやる狼の温情が見事に対比され、分け前を争う盗賊たちや王様の気まぐれも、妙にリアルに世の中の現実を反映している。笛を吹き動物と親しみ、死後も自由を愛する少年の姿とは対照的である。

民話「笛を吹く骨」は、KHM二八「歌う骨」や日本の「踊る骸骨」と比べて、善悪の観念以前の、あるいはそれ

を超えた、何か素朴で原初的で哀感ある余韻を残す。ある意味、バラード風の趣がある。

次に紹介する南欧イタリアの「孔雀の羽」(カルヴィーノ『イタリア民話集』下／河島英昭編訳⁽²²⁾)も、「笛を吹く骨」同様、歌が物語の中で絶妙な効果を挙げる民話である(要約)。

二B 「孔雀の羽」(イタリア／シチリア島)

ある王様が盲目になった。どの医者も治療できずにいたが、一人の医者は孔雀の羽が唯一の薬だと言った。王様は三人の息子を呼び、孔雀の羽を持ってきた者に王国を譲ると告げた。そこで息子たちは旅に出た。上の二人はすでに大きく、末の息子は小さかった。森の木の下で眠ったあと、末の弟が最初に目を覚ました。森の奥から孔雀の鳴き声が聞こえ、弟が近づいて泉で水を飲んでみると、空から一枚の羽が落ちて来た。弟が孔雀の羽を取って来たのを見て兄たちは嫉妬に駆られて弟を殺し死体を埋めた。彼らは父親の許に帰って孔雀の羽を渡した。それを目に当てると、王様の眼は恢復した。王様が弟のことを尋ねると、森の恐ろしい獣に捕らわれたのだ

ろうと兄たちは答えた。

その後、弟が埋められた地面から美しい葦が生えた。羊飼いがそこを通り、葦笛を作った。息を吹き込むと、葦笛は歌い出した。「おお、ぼくを握ってくれた羊飼いや、／そうと吹いておくれ、心は苦しんでいるのだから。／孔雀の羽のためにぼくは殺されてしまった、／裏切者はぼくの兄だった」。羊飼いはその不思議な葦笛で稼ごうとナポリの町へ行った。笛を吹くと、王様が窓から顔を出し、音色に聴きほれ、羊飼いを呼び寄せた。羊飼いが王宮で葦笛を吹くと、王様も自ら笛を吹いた。笛は「おお、ぼくを握ってくれた父上よ、／〔以下同じ〕」と奏でた。女王が吹くと「おお、ぼくを握ってくれた母上よ」と歌い、二男が嫌々吹くと「おお、ぼくをつかまえてくれた兄上よ」と歌った。最後に王様が長男に命じると、「おお、ぼくを殺してくれた兄上よ」と声が響いた。その言葉を聞いて父親は倒れ伏し、お前たちが弟を殺したのかと叫んだ。二人の兄は火焙りとなり、王様は宮廷の奥で、毎日、悲しげに葦笛を吹き鳴らした。⁽²³⁾

右の民話はイタリアのシチリア島中央部カルタニセッタ

近郊で採集されたものである。冒頭部分はKH M九七「生命の水」⁽²⁴⁾と似ているが、その後の展開は、微妙に変化する葦笛の歌とともに、終結部へ向かって一歩一歩緊張が高まってゆく。抒情性と緊迫感が絶妙に組み合わされたバラード調のこの民話について、編者イータロ・カルヴィーノはこうコメントする。「挽歌の憂愁を伴ってこれが世界じゅうについてまわるのは、調べが葦笛から生まれるためであり、しなやかな変身を経て、殺された若者の魂の転生が物語られるからだ」⁽²⁵⁾。なおカルヴィーノは、骨から作られた笛を、多くの例に倣って、葦笛に差し替えた⁽²⁶⁾と断っている。

インドの「笛を吹く骨」、イタリアの「孔雀の羽」、いずれも音楽（歌）が重要な役割を演じ、最後に哀愁を帯びた余韻を残す点が共通している。また前述KH M二八「歌う骨」と「孔雀の羽」は、前者が人骨から作られた笛、後者が骨の生まれ変わりの葦笛が、それぞれ殺人の真実を告げている。日本の昔話「継子と笛」はこのタイプに属している。

第三章 骨の神話と伝承

ドイツと日本、インドとイタリヤ、いずれの「歌う骨」タイプも、題名通り、骨が物語の核になっていることが明らかとなったが、イタリヤ民話「孔雀の羽」の「原注」の中で、編者カルヴィーノは興味深いコメントを書いていて、殺された若者（末の弟）の「魂の転生」である。この問題に触れる前に、本章では骨の神話と伝承を幾つか覗いておくことにしたい。

三 A 『日本霊異記』

八二二年頃成立したと言われる日本最初の仏教説話集、景戒編『日本霊異記』（『日本国現報善悪霊異記』⁽²⁷⁾）上巻第十二「人・畜「けもの」に履「ふ」まれし髑髏「ひとかしら」の、救ひ収めらえて霊「あや」しき表「しるし」を示して、現に報いし縁」は次のような内容である（要約）。

高麗の留学僧であつた道登は元興寺「がんこうじ」の僧で、昔、大化二年（六四六年）、宇治橋をかけるため

に往来していたとき、髑髏「どくろ」が奈良山の谷間で人や獣に踏まれていたのを見て哀れみ、従者の万呂に命じて髑髏を木の上に置かせた。同年の大晦日の夕方、ある人が寺門に来て、聖の慈悲に報いたいと言って、万呂のある家に案内した。その人は供物を万呂に分け、二人が食事をしていると、夜半、男の声がした。私を殺した兄が来そうなので早く帰りましょうと、その人が言うので、万呂が理由を尋ねるところ答えた。昔、私は兄と商いに出掛け銀を大いに稼いだが、それを妬んだ兄は私を殺して銀を奪った。それから幾久しく私は人や獣に踏まれていた。それを道登上人様が救つて木の上に安置させて下さった。今夜はその恩返しです、と。その時、母と兄が大晦日の魂祭りに入つて来て、万呂を見て驚いた。万呂が説明すると、母は兄を罵った。万呂は帰つて道登にそれを報告した。「夫「そ」れ、死霊・白骨すら尚猶「なほ」し此「か」くの如し。何「いか」に況「いはむ」や、生ける人、豈「あに」恩を忘れむや」⁽²⁸⁾。

兄弟が商売に出掛け、弟が儲けたのを兄が妬んで殺して埋める。しかし骨となった弟の霊が後に兄の犯行を告げるといふ話は、日本昔話「踊る骸骨」を想起させる。

ちなみに、「踊る骸骨」とKHM二八「歌う骨」では、殺人犯に罰が下るが(第一章)、『日本霊異記』の右の物語では、それらとは対照的に、殺人犯の兄は真実を知った母親に罵られるだけで、具体的な罰は受けておらず、恩を忘れるな、という説教が最後を締めくくる。

『日本霊異記』にはもう一篇、類似の話が収められている(下巻第二十七)⁽²⁹⁾。そこでも、盗賊の伯父に殺された人物の髑髏が、目の穴に生えた竹の子を抜いてくれた人を晦日の食事に接待する。上巻第十二と同様、いわゆる「枯骨報恩譚」である。「話型について」で見たように、日本版「歌う骨」(七八〇番)の構成要素として、池田弘子は「感謝する死者」を追加したが、実際、「踊る骸骨」タイプとは別に、わが国には「報恩」に力点を置いた話も流布している。⁽³⁰⁾ いずれにせよ、『日本霊異記』では、骨となった死者が、生者の恩(樹上への安置／竹の子の抜き取り)に霊となって報いている。骨に魂が宿るといふ観念あるいは信仰がこれらの物語の根底になっていることは明白である。『日本霊異記』の範例として、中国の『敦煌變文集』所収の「搜神記一卷」が指摘されている。⁽³¹⁾ その成立時期は四世紀から六世紀にかけてと言

われる。古代の伝承に「歌う骨」タイプは繋がっているようである。

三B 「エゼキエル書」(『旧約聖書』)

骨に関する神話・伝承の中で興味深いものの一つに『旧約聖書』「エゼキエル書」がある。この預言書の第三十七章には次のように記されている(「」は引用)(要約)。

私(エゼキエル)は主の霊に連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨で満ち、谷の上にも多くの骨があつたが、甚だしく枯れていた。主は私に言われた、「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る」。私が命じられた通り預言すると、カタカタ音がして骨が近づき、骨の上に筋と肉が付き、皮膚がそれを覆い、霊が吹き込まれた。すると彼らは生き返り、自分の足で立ち、

大きな集団となった。主は言われる「これらの骨はイスラエルの全家である」⁽³²⁾。

紀元前五九七年、ネブカドネツアル二世はイスラエルの民をバビロンに拉致したが、その中に預言者エゼキエルがいた。彼はバビロンで召命を受け、民族の再興を希求し幻想的に未来像を描き出した。⁽³³⁾ 右の第三十七章は、骨からの再生のイメージを駆使して、イスラエルの回復を語っている。ルターの独語訳では「骨」は *Gebaine*、「枯れた」は *verdort* で、枯骨報恩ならぬ枯骨再生がここでは主題となっている。イスラエル民族全体を「枯骨」と呼び、そこに生命を吹く込む主の「霊」*Oden* をエゼキエルは称えて止まない。⁽³⁴⁾ 紀元前六世紀にはすでに、骨からの復活への信仰は語られていたのである。

三C 『エッダ』

古代北欧歌謡集『エッダ』*Edda* にも、骨からの再生は神話として記録されている。アイスランドの詩人・歴史家スノリ・ストゥルルソン *Snorri Sturluson* (一一七八—一二四一年) の『エッダ』(散文エッダ)「ギュルヴィたぶら

かし」第四十四章には次のように書かれている。

トゥールが山羊にひかせた車にのり、ロキという名のアース神も同乗していた。彼らは晩方、ある百姓のところにきて、宿をとった。そしてその夜、トゥールは山羊をつかまえて二頭とも殺した。それから皮を剥いで鍋のところにまで運び、料理ができあがると、連れの者と一緒に夕食の席についた。「……」トゥールは山羊の皮を火のそばにひろげ、百姓とその家族に、骨を山羊皮の上に投げようにといった。「……」トゥールはその夜そこに泊った。そして翌朝まだ明けやらぬうちに起き、衣服をつけ、槌ミョルニルを手にとつて振り上げ、山羊皮を淨「きよ」めた。すると、山羊たちは立ち上がった」(谷口幸男訳⁽³⁵⁾)。

雷神トゥールが人々に命じて山羊皮の上に山羊の骨を投げさせたのは、後で淨めて山羊を復活させるためであった。骨を完全なかたちで残すことによって、生命体を再生させるという信仰、これは様々な民族に見られるようで、例えば、狩猟民族は捕獲した動物の骨を壊さずに土に帰す風習

があると言われる(『図説 世界シンボル事典』⁽³⁶⁾)。

『旧約聖書』「エゼキエル書」では人間(民族)の骨からの復活が描かれていたが、右の『エツダ』では動物もやはり骨から復活すると語られる。骨が生命力の源であるという信仰は、時代や民族を超えて、広く浸透しているようだ。この民間信仰は、実は、グリム童話にも明確に現れている。

第四章 小鳥転生譚

一八一二年の初版以来、グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』KHM四七番に収録されている「ねずの木の話」Von dem Machandelboomは、骨のモチーフの観点からも印象深い昔話である。バルト海沿岸ポンメルン出身の画家フライリップ・オットー・ルンゲが、一八〇六年、ハンブルクで方言(低地ドイツ語)のまま書き留めたメモに拠ったもので、KHM第七版は要約すると次のようになる。⁽³⁷⁾

四A 「ねずの木の話」(KHM四七)

二千年も昔、金持ちに美しい妻がいたが、子供はいな

かった。ある日、庭のねずの木の皮下で妻が林檎の皮をむいていたとき、指を切り、血が雪の上に落ちたのを見て、彼女は血のように赤く雪のように白い子供がいたらと願った。やがてねずの木に実がなり、それを食べた妻は気が沈み病気になった。八か月が経ち、妻は夫に、自分が死んだらねずの木の皮下に葬ってくれるように頼んだ。九か月が過ぎ、彼女は男の子を産んだが、喜びのあまり死んでしまった。

しばらく後、夫は再婚した。二度目の妻に女の子が生まれ、彼女は先妻の男の子を苛め始めた。妻に悪魔が乗り移り、あるとき、彼女は大きな箱から男の子に林檎を取らせ、重い蓋を勢いよく閉じてその首を落とした。白い布で首を胴体に固定し、手に林檎を持たせて椅子に座らせた。何も知らない娘のマリアが林檎を欲しがったとき、母親は娘に兄の耳を打たせ、マリアが首を落としたかのように仕組んだ。そして、男の子の肉を刻みスープを作った。父親が帰宅し、息子の行方を尋ねると、母親は大伯父のところへ行つたと言った。父親は知らずに息子の肉スープを美味しそうに食べ、マリアは父の投げた骨を絹の布に包んでねずの木の皮下に置いた。すると木か

ら霧が出て鳥が現れ消え、骨も消えた。鳥は金細工師の家の屋根で歌った。「お母さんがほくを殺した、／お父さんがほくを食べた、／妹のマリアが、ほくの骨を捜し、／絹の布に包んで、／ねずの木の下に置いた。キウイット、キウイット、何てきれいな鳥だろう、ほくは」。鳥は金細工師から黄金の鎖をもらい、靴屋の屋根で同じ歌を歌って赤い靴をもらい、粉挽き場では石臼をもらった。鳥は父親の家に行き歌った。母親にはその歌が嵐のように聞こえた。鳥は父親に鎖、妹に赤い靴をプレゼントしたが、母親の頭には石臼を落とした。父と妹が外に出ると霧と火が上って消え、兄がそこにいた。三人は大喜びで食事をした。⁽³⁸⁾

冒頭、「二千年も昔」と珍しく具体的な年号が記された右の昔話は、ボルテ／ポリフカの注釈書によると、ドイツ語圏以外に、北欧デンマーク、スウェーデン、フィンランド、またスコットランドとイギリス、ロマンス語圏のフランス、イタリア、スペイン、ルーマニア、さらにスラヴ語圏のチェコ、スロヴァキア、ロシア、そしてラトヴィア、エストニア等々、ヨーロッパ全域に広く伝承されている。⁽³⁹⁾

題名となっている「ねずの木」Machandel / Wacholder (柏槇 / 杜松) は、ヒノキ科の灌木で、常緑の固い針葉をつけ、紫黑色の実はアロマや薬用に用いられる。ラテン語名 *Juniperus* は「若返り」を意味し、老木は小枝が垂れ下がり大木になる。ドイツではすでに古代ゲルマン時代から知られ、崇拜されてきた植物のようで、民間では特に、悪魔、魔女、悪霊といったデーモンから人間を守る樹木として親しまれてきた。⁽⁴⁰⁾ KHM四七には、ねずの木のそうした特性と民間信仰が色濃く反映されている。

物語の中で、主人公の男の子を産んですぐに亡くなった実母は、自らの意思でねずの木の下に埋葬された。継母に殺され、父親に（知らずに）食べられた男の子の骨は、妹によって、ねずの木の下に置かれた。するとそこから霧が出て小鳥が飛び立った。守護霊となった母親＝ねずの木に抱かれて、男の子は小鳥に変身したのである。この小鳥転生譚は、イタリア民話「孔雀の羽」を想起させる。ここでは、兄たちに殺され埋められた弟が眠る土の中から葦が生え、その葦で羊飼いが笛を作って吹くと、笛は兄たちの犯罪を歌で告げる。カルヴィーノはこれに関して「魂の転生」を語った。骨から葦へ、葦から笛へと転生しながら弟

の魂は死後も生き続けるのだが、「ねずの木の話」の場合、魂は小鳥へと変身する。

死者の魂が鳥となつて大空を飛翔する「魂の鳥」「霊鳥」[Seelenvogelの観念あるいは信仰は、『ドイツ俗信辞典』⁽⁴⁴⁾によると、インド＝ゲルマン(ヨーロッパ)語族に共通しているばかりではなく、中国、インドネシア、メラネシア、アフリカそしてアメリカでも確認されるという。ドイツの民間信仰において、鳥は霊的かつ予言的存在で、死の使者でもある。古代キリスト教美術でも、鳩は天国へ飛翔してゆく死者の魂を表現する。⁽⁴⁵⁾

人間の魂が、死後、肉体から離れて、他の存在(動物、植物、人間等)に生まれ変わるといふ観念、いわゆる輪廻の思想は、古代インドにおいて有名だが(ウパニシャッド時代以後は、輪廻転生を断ち切る解脱が重要となる)、⁽⁴⁶⁾同思想は、インドのみならず古代ギリシア、特にピュタゴラスやプラトンにも見られ、またヘロドトスも『歴史』⁽⁴⁷⁾の中で、エジプト人の輪廻観について語っている。

KHM四七「ねずの木の話」は、時代を敢えて明示し「二千年も昔」の物語として紹介されていたが、その中の小鳥転生の挿話には、以上のような古代の輪廻思想が反映

しているように思われる。想起されるのは、KHM二一「灰かぶり」[Aschenputtel]⁽⁴⁸⁾の場面である。父親から土産に「はしばみの若枝」をもらった女主人公は、それを亡き母の墓に植える。はしばみHazelは、ドイツの民間信仰において、ねずの木と同様、人々を保護する聖木として崇拝されてきた植物である。⁽⁴⁹⁾灰かぶりが大切に育てたはしばみの木は大きくなり、そこに「白い小鳥」が飛んで来て、彼女が必要とするものを投げ落としてくれる。母のイメージは、聖木(はしばみ)とも小鳥とも重なり合い、超自然の援助者となつて愛娘を苦境から救ってくれる。KHM二一「灰かぶり」の亡母は、KHM四七「ねずの木の話」の亡母ともども「魂の鳥」に転生したのである。これらの昔話の背景に小鳥転生の輪廻思想が息づいているのは明らかである。

結語

「歌う骨」は世界中に分布する昔話だが、その起源に関して、従来、様々な説が提示されてきた(『昔話百科事典』⁽⁴⁸⁾)。中でも、ドイツの口承文芸学者ルッツ・マッケンゼ

ンのフランドル説（F F C 四九／一九二三年）とフィンランド学派のカルレ・クローンのインド説（F F C 九六／一九三一年）は有名だが、他にも、スラヴ地域（ヴェンド／ポーランド／ウクライナ）のバラード説、イギリスおよびスカンディナヴィアのバラード説等が唱えられた。⁴⁹ 他方、伝承経路の拠点については、ヨーロッパとアジアの間に位置するコーカサスおよび東欧の他、イランやシチリアの名が挙げられている。⁵⁰

本稿では、インド・パンジャブ地方（「笛を吹く骨」を中心に、その西側ではシチリア島（「孔雀の羽」とドイツ（K H M 二八「歌う骨」）の類話を見てきたが、それらを概観して浮かび上がってくる特徴として音楽的要素を数えることが出来る。「笛を吹く骨」では、叔父に冷遇され狼に食べられて骨となった少年が、死後も笛を奏でる。「孔雀の羽」では、殺された一番下の弟が、葦笛となって兄たちの凶行を歌に歌い、グリム童話「歌う骨」では、殺された弟が骨となり笛となって兄の犯罪を歌で暴く。また同じくグリム童話「ねずの木の話」でも、殺された少年は鳥となって、継母の犯行を美しい歌声で告知する。内容は衝撃的で、口承で流布していたその歌をゲーテが畢生の大作

『ファウスト』Faustの印象的な場面で効果的に用いたことはよく知られている。⁵¹ 「歌う骨」のバラード起源説の根拠としてもそれは興味深いが、注目すべきは、昔話におけるこうした音楽的要素とその抒情性（美しい笛の音や歌声）が、殺害や復讐といった絶望的な内容を、ある意味、浄化していることである。物語の中のこの音楽性は、そのカタルシス作用によって、重いテーマを昇華し、聴き手や読者に芸術作品としての「歌う骨」を味わわせてくれるのである。

一方、インドよりも東側の「歌う骨」に目を転じると、この昔話に関して、柳田國男は重要な発言を残している。曰く、「欧羅巴ではかなりもてはやされている昔話に、古風なる死人感謝譚（ル・モール・ルコンネッサン）というのがある。あるいはまた歌うたう骸骨ともいつて、その死人が髑髏になって歌ったり過去を語ったりしたという話が多い。これなども『日本霊異記』の昔から、よく纏まった形で久しい間弘く我々の中には伝承せられていた。私はこの事実を解して、この種の説話が夙「はや」く神話信仰の時代を去り、一箇言語の芸術となってしまうてから後に、この日本民族の間に運び込まれたことを、意味するもので

あろうかと思っている」。つまり、「歌い骸骨」は「成熟期を過ぎて、熟した果実として受用せられたもの」で、それ故「渡来後の変化が案外に少なかったのではないか」と柳田は推察する。⁽⁵²⁾

今日、「歌い骸骨」(枯骨報恩)の起源として『敦煌変文集』「搜神記二卷」が有力候補の一つとして挙げられている。⁽⁵³⁾紀元後四〜六世紀成立とされているものである。柳田が語るように、インド以東では、中国の影響下に、日本の枯骨報恩系の「歌う骨」(『日本霊異記』)が、最初から完成した作品として、伝承されたのかも知れない。仏教思想を反映して、ここではインド以西の音楽的「歌う骨」とは別種の説話が定着したかと思われる。もちろん、わが国の「歌う骨」に音楽的要素がまったく欠如していたわけではない。「継子と笛」系統の昔話にその要素は窺われるからである。

ところで、「歌う骨」の魅力と迫力は、何と言っても、骨にある。死してなお久しく生物のたちを留めるその耐久力と神秘性は、時代や民族を超えて、人々を惹きつけてきたにちがいない。ある時は、闇に葬られた真実(殺人)を歌に歌い、またある時は、己を安置してくれた人物に感

謝し、さらに別の折りには、踊りを披露しながら密かに復讐計画を練る骸骨は、不滅のエネルギーを内に秘めて、絶えずその出没の機会を窺っている。

テキスト

* Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, 3Bde., hrsg. von Heinz Rölleke, Philipp Reclam jun., Stuttgart. Bd. 1/2, 1982, Bd. 3, 1983; (以下 Reclam KHM と略記)

* 「柳田國男全集」全三二巻、ちくま文庫版

註

- (1) グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』二八番「歌う骨」／稲田浩二編『日本の昔話』上「踊る骸骨」等(後述)
- (2) Antti Aarne and Stith Thompson, The Types of the Folktales, Helsinki, 1987 (1961, Second Revision) (以下 A T とも略記)
- (3) *ibid.*, p.269.
- (4) Reclam KHM, Bd. 1, S. 164-167 (Der singende Knochen)

- (5) 稲田浩二編『日本の昔話』上、三〇〇—三〇三頁
- (6) 註(4) 参照
- (7) Reclam KHM, Bd. 3, S. 454-455.
- (8) a. a. O., S. 55-56.
- (9) a. a. O., S. 55-56.
- (10) a. a. O., S. 56.
- (11) 関敬吾『日本昔話大成』5「本格昔話」四、角川書店、昭和五六(五三)年、二七一—二七七頁
- (12) 註(5) 参照
- (13) 稲田浩二『日本の昔話』上、三〇四—三〇六頁
- (14) 註(3) 参照
- (15) Hiroko IKEDA, A Type and Motiv Index of Japanese Folk-Literature, Helsinki, 1971 (FFC209), p.183-185.
- (16) 『日本昔話名彙』柳田國男監修、日本放送協会編、日本放送出版会、昭和四七(二三)年
- (17) 註(11) 参照
- (18) 関敬吾『日本昔話大成』6「本格昔話」五、角川書店、昭和五六(五三)年
- (19) 『世界の民話』「パンジャブ」小澤俊夫編／関楠生訳、きょうせい、昭和六三(五三)年
- (20) 前掲書、二二二—二二六頁
- (21) dtv-Brockhaus Lexikon, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1982, Bd. 13, S. 314. (Pandschab)
- (22) カルヴィーノ『イタリア民話集』下、河島英昭編訳、岩波文庫、二〇〇四(二九八五)年
- (23) 前掲書、一五〇—一五四頁
- (24) Reclam KHM, Bd. 2, S. 69-75 (Das Wasser des Lebens)
- (25) 註(22)、三六〇頁
- (26) 同、三六〇頁
- (27) 『日本霊異記』全訳注／中田祝夫、講談社学術文庫、上／一九九七(七八)年、中／一九九六(七九)年、下／一九九六(八〇)年
- (28) 前掲書、上、一〇六—一一頁
- (29) 前掲書、下、一九一—二〇〇頁
- (30) 註(18)、一〇二—一〇六頁
- (31) 『昔話・伝説必携』野村純二編、別冊國文學No.41、一九九一年、一二頁「歌い骸骨」(高橋宣勝)／『日本昔話事典』稲田・大島・川端・福田・三原編、弘文堂、平成一一(六)年、三三二—三三三頁「枯骨報恩」(福田晃)
- (32) 新共同訳『聖書』、日本聖書協会、一九九四年、旧約聖書「エゼキエル書」一三五七—一三五八頁
- (33) 『聖書百科全書』ジョン・ボウカー編著、荒井・池田・井谷監訳、三省堂、二〇〇〇年、二二二—二二五頁
- (34) Die Bibel, nach der Übersetzung Martin Luthers, Württembergische Bibelanstalt, Stuttgart, 1968, S. 975-976.
- (35) 『エッター古代北欧歌謡集』谷口幸男訳、新潮社、昭和

- 四八年、二六〇—二六一頁
- (36) Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, hrsg. von Hanns Bachhold-Stäubli, 10Bde., Walter de Gruyter, Berlin/New York, 2000. (HdA), Bd. 5, S. 6-14. (Knochen) / 『図説世界シンボル事典』ハンス・ビーターマン著、藤代幸一監訳、八坂書房、二〇〇〇年、三九四—三九五頁
- (37) Reclam KHM, Bd. 3, S. 462.
- (38) Reclam KHM, Bd. 1, S. 239-248.
- (39) Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm, Neu bearbeitet von Johannes Bolte und Georg Polivka, Olms-Weidmann, Hildesheim/Zürich/New York, 1982, Bd. 1, S. 412-423.
- (40) HdA, Bd. 9, S. 1-14. (Wacholder)
- (41) HdA, Bd. 7, S. 1572-1577. (Seelenvogel)
- (42) 『西洋シンボル事典』—キリスト教美術の記号とイメージ、ゲルト・ハインツ・モア、野村・小林監訳、八坂書房、二〇〇七(〇三)年、二四五—二四七頁(鳩)
- (43) 井本英一『輪廻の話』—オリエント民俗誌、法政大学出版局、一九九一(八九)年、二—三三頁
- (44) HdA, Bd. 7, S. 1577-1580. (Seelenwanderung)/Die Vorsokratiker I, Griechisch/Deutsch, Auswahl der Fragmente, Übersetzung und Erläuterungen von Jaap Mansfeld, Reclam jun. Stuttgart, 1991 (83), S. 170-171. / ラトン『国家』(下)、藤沢令夫訳、岩波文庫、一九八二(七九)年、三五五—三五七頁
- (45) ヴロドトス『歴史』(上)松平千秋訳、岩波文庫、昭和四九(四六)年、二四〇頁。
- (46) Reclam KHM, Bd. 1, S. 137-144.
- (47) HdA, Bd. 3, S. 1527-1542. (Hasel)
- (48) Enzyklopädie des Märchens, Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung, Begründet von Kurt Ranke, Walter de Gruyter, Berlin/New York, Bd. 12, 2007, S. 707-713. (Singerder Knochen)
- (49) a. a. O., S. 707-708.
- (50) a. a. O., S. 711.
- (51) Reclam KHM, Bd. 3, S. 78.
- (52) 『柳田國男全集』10、一九九〇年所収、『桃太郎の誕生』一八一—一九頁
- (53) 註(31) 参照

*本稿は、本学グローバル研究プロジェクトの研究成果の一として発表するものである。